

アルコール・薬物依存症者のための 加州治療回復施設をたずねて

2007年9月15日～23日



米国カリフォルニア州にあるアルコール・薬物依存症者のための治療回復施設3ヶ所で研修しました。施設は、ロサンゼルス郊外のベティ・フォード・センター、市内のパシフィック・コースト・リカバリー・センターおよびクリア・ファンデーションでした。昨年2月に、茨城ダルクの岩井代表率いる視察団が、同種のスペイン施設「プロジェクト・オンブレ」を参観しましたが、これに続く機会でした。

仲間とともに研修効果をあげる

この研修旅行には、アスク・ヒューマン・ケア研修相談センターの水澤都加佐（つかさ）所長を引率者とし、総勢13名が参加しました。日本各地とポルトガルから馳せ参じた方々、つまり、医師、カウンセラー、ソーシャルワーカー、臨床心理士、大学教授、薬剤師、保健師、鍼灸師などでした。依存症者を抱える家族からも3名が参加しました。女性は7名と過半数を占め、しかも30歳台の若い女性が4名も参加し、日本の活力のほどを実感しました。参加者は旅行中活発に意見を交換、各研修先では熱心、執拗に質問し、研修効果をあげました。



活発な意見交換

多種、多様な治療・回復プログラムを開発、実施——共通する特色

これら3施設は、アルコールと薬物依存症者のために、所得、社会階層等の違いに志しそれぞれ対応した、多様な治療・回復プログラムを熱心に開発、実施しており、専門職の自信と意欲ぶりが感じられた。

(1) 米精神医学会においても、依存症が病気であることは定説となっているものの、脳医学との関連で、そもそも「依存症」とはいかなる障害であるのか、またいかなる治療法が確実に有効であるのか、については必ずしも確立した考え方がなく、いまだ試行錯誤でありながらも意欲的に探求が続けられている。

(2) これらの施設は、医師、依存症回復者を含むカウンセラーなどの専門職が協働して治療・回復支援作業に従事しているという点で、いずれも「治療共同体」を形成している。

(3) アルコール依存症と薬物依存症を同種類の症状と捉え、同じ施設内で男女区別なく治療・回復の支援を行っている。

(4) 専門職員が自信と意欲をもって作業に当たっており、とくにカウンセラーたちの活躍ぶりはめざましく、また、その中にアフリカ系、ヒスパニック、ユダヤ系、レスビアンなど一見してそれと分るひとたちも加わっており、ここに多様性、相異性を容認するアメリカ文化の特筆が窺われる。

(5) 施設を出た後の継続支援を重視しており、AA（アルコーリクス・アノニマス）ないしNA（ナルコティクス・アノニマス）集会の有効性を認め、これに本人たちが継続して通うよう勧めている。

(6) われわれ外部の参観者に対しても、きめ細かな研修プログラムを設けて熱心に講義してくれるなど、いわゆるPR（プロモーション）セールス精神が旺盛である。

研修日程

16日	夕	一同紹介、打ち合わせ
17日		ベティ・フォード・センターでの研修
	午前	「継続ケア」、「回復におけるスピリチュアリティ」
	昼	スタッフと昼食
18日	午後	「依存症と脳」、「家族のダイナミックス」、「集中継続ケア」
	午前	「グループセラピー」、「子どもの回復支援」
	昼	スタッフと昼食
20日	午後	「セラピーにおけるイメージ誘導」、「フィットネスと回復」、 研修証書授与（瞑想室にて）
		パシフィック・コースト・リカバリー・センターでの研修
	午前	脳と依存症
21日	昼	スタッフと昼食
	午後	「家族介入」実演、「創造力表現」、研修証書授与
		クレア・ファンデーションでの研修
	午前	「超越感と依存症」
	昼	スタッフと昼食
	午後	「日米精神医療学会における依存症研究」、「施設経営とプログラム」 研修証書授与

各施設の特徴、注目点

☆ ベティ・フォード・センター：「スピリチュアル・ケア」に力を入れる

80年代初め、フォード元大統領ベティ夫人の率先と大統領はじめ有力政治家、経済人などの支援を得て設立された非営利法人。ゴルフ場で有名なパーム・スプリングに近い、アイゼンハウワー総合病院の敷地の一角にあり、広大な敷地に広々とした諸施設が点在している。入所費は、平均月2万ドル（約230万円）であるが、これは米国の標準では比較的安いとされ、ほかでは入所費月4、5万ドル（約5、6百万円）という施設もある由。また、このセンター内には、パイロットや高級軍人など公共安全業務に従事する専門職の依存症者のために特別プログラムも実施されている。

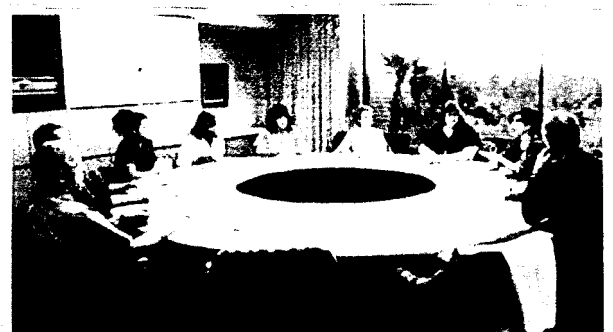
受け入れ審査と解毒作業を経て、入所して数ヶ月間かけて各自の状況に対応したきめ細かいプログラムを受けるが、とくに「スピリチュアル・ケア」に重点を置き、人間性を回復させることに努めている。「スピリチュアリティ」についてののかつてのセンターの考え方は、キリスト教の教えに近かったが、最近では、規範とか「正しい生き方」を重視する宗教的考え方とは区別して、もっと広い意味での「生命の本質」とか「人間としての喜び」への目覚めを促すこととしている。この点に関連して注目されたのは、これまで日本でもAAやNAで使われている12ステップ中の「神」や「ハイヤー・パワー」とかの文言に代わり、「集合知 (Collective Wisdom)」とか「リソース・社会資源」とか、より普遍的な表現の使用が試みられていることであった。また、この「神なきスピリチュアリティによる回復」につき講義したのは、アフリカ系女性の依存症回復者であり、教会牧師とカウンセラーのライセンスをもつ人物であったことも、興味深かった。



広い敷地内を歩く



研修センター内部



「治療共同体」を象徴する スタッフ会議

実際の作業の過程では、抽象的に「スピリチュアリティ」を論じるのではなく、本人がスピリチュアル面でどの程度成長したかを実際に判定するため、本人に定期的に「評価表」に詳しく記入させ、これをカウンセラーがチェックすることとしている。

本人の回復度に応じて、退所後外部の施設に居住しながらセンターに通いプログラムを受け、次に本人たちがアパートなどを借りて共同生活し、軽い仕事に就きながら夜間 AA や NA 集会に参加するという段階を経て、徐々に強制度を軽くしつつ (less structure)、本人の継続的な薬物等の離脱と自立をはかっている。

この点で、センターが重視するのは、「集中継続ケア」(Focused Continuing Care) であり、これにより退所後本人にスタッフが一年間電話連絡等によりかかり、本人のスリップ防止に努めている。このほか、約 4 千人いる「卒業生」たちによる年次同窓生大会開催も本人たちの回復継続に役立っている。

また、家族や子どもの癒しプログラムに力を入れている。とくに、子ども向けプログラムとして、センターの名物講師による迫真の演技を混ぜた講義が行われ、われわれ一部参観者の感涙を誘っていた。

最後に、このセンターでの回復率実績につき質問したところ、この種統計作成には技術的困難があるものの、完全回復者は三分の一、一年間スリップしないもの三分の一、快癒しないもの三分の一であるとの答えだった。

☆ パシフィック・コースト・レカバリー・センター：「家族介入」を重視

センターは、保険会社が経営する総合病院の一部門としてワン・フロアーを占める。40 床と 25 人のスタッフを抱える。入院費は、美しい海岸を見下ろす個室専用の場合一日 1 千 5 百ドル、さらに解毒治療費が一日 1 千ドル、回復プログラムが一日 9 百ドルかかり、1 ヶ月当たり総額は 4、5 万ドル (5、6 百万円) にもなる。患者の半数は費用を保険で支払い、そのほかは自費負担の由。同行の米人コーディネーターの説明によれば、このセンターでは、患者が受ける治療の内容は、保険会社の判断によって決定されることが多い由。

このセンターで力を入れているのは、「家族介入」(Family Intervention) である。依存症者の病状のひとつは、病気を否認して治療回復支援を拒むことにあるが、これを本人のいわゆる「底つき」まで待つことなく、家族など関係者が介入して本人に治療を早く受け入れることに同意させること(いわゆる「底上げ」)を狙いとする。このため、センターは、家族グループ(祖父母、孫などを含め多い方がよい、時に会社の上司も加わる)にあらかじめ芝居の「台本」を渡し、それに従って家族集会を催し、これに本人を突然呼び込み、全員から本人へ愛情のほどを伝えるとともに治療を受け入れるよう説得を試みる。われわれ参観者のために、センターのスタッフたちはその模擬芝居を熱心に演じてみせてくれ、興味深かった。



パシフィック・コースト・レカバリー・センター入口



スタッフによる『家族介入』芝居実演

☆ クレア・ファンデーション：貧困層を対象とする社会福祉施設

前身は、1970年代に浮浪者たちに対する食事供与などの住民の奉仕活動から始まった。現在本部は、ロス市の中心街にあり、一見倉庫か安事務所風の入り口を入ったところに、受け入れ審査、解毒、食堂、宿舎等の施設がある。毎日約40名の入所希望者が押しかけ、2、3百回の電話照会があり、また3百人分の食事を供与する。ホームレスのアルコールまたは薬物依存症者も受け入れ、費用は収入に応じて徴集し、収入がないことを理由に受け入れを拒否することはない。約2百床の収容能力をもち、ベッドが空き次第新人を収容する(年間約2700人収容)。電話相談を含め11のプログラムを実施する。薬物事犯として警察に捕まったものの内、運よく訴追されなかったものたちがこの施設で受け入れられる。一方、訴追されたものは、ドラッグ・コート制度により裁判官の勧めで、アミティという別の施設が受け入れている。収入の約60%は主として州および郡の司法関係の予算から得ており、社会福祉ないし教育関係の予算からの補助金は少ない。また収入の約25%は、民間からの寄付金による。

スタッフの約半数は、依存症回復者でライセンスを得たカウンセラーなどである。ただし、殆どのスタッフの給料は、一般に比べ低い。施設の運営などは、ニューヨークのデイトップ・ヴィレッジのような階層組織や「直面」

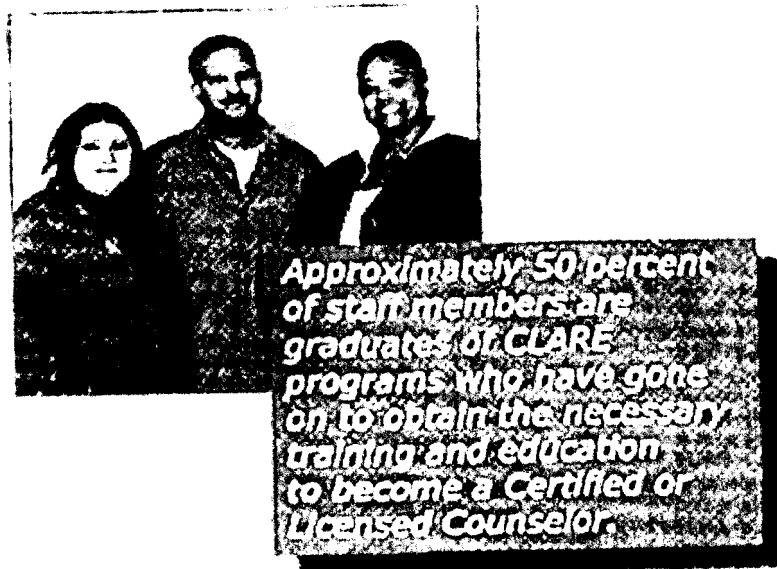
(encounter) 集会方式(このやり方は感情的なしこりを残すだけで効果がないと考えている)を採り入れずに、民主的にコンセンサスを得るやりかたを重視している由。



クリア・ファンデーションの
入口の戸を開ける木澤所長



熱演するプログラム担当部長、回復者デイヴィッド



Approximately 50 percent
of staff members are
graduates of CLARE
programs who have gone
on to obtain the necessary
training and education
to become a Certified or
Licensed Counselor.

スタッフの半数は依存症回復者

参考情報：アメリカにおける「治療共同体」の歴史

アメリカにおいては、薬物依存症者のための治療回復支援施設は、1958年にカリフォルニア州において、薬物依存症者による自助グループ「シナノン」によって始まった。しかし、「シナノン」運動は、指導者の資質もあり、「カルト集団」化し、衰退した。これに代わったのが、1963年からニューヨークを本拠地とし発展した「デイトップ・ヴィレッジ」である。今日「デイトップ」は米国における最古、最有力な「治療共同体」として、国際的にも「治療共同体」運動推進上指導的役割を果たしている。「デイトップ」方式の特徴は、①医師、カウンセラー等の専門職と依存症回復者が協働して治療回復支援作業に従事するとともに、初期「シナノン」の成果の一部を受け継ぎ、②依存症者たちが階層的社会を作り、規律を守る程度に応じて身分が上下する、③「直面集会」において相互批判をし合う、などである。今日米国各地には、「デイトップ」の支援協力を得て設立された施設もあるが、独自の方式を開発実施している施設も多い。なお、アリゾナ州を根拠地として活動する「アミティ」は、かつての「シナノン」指導者デーデリッヒの妻（アフリカ系）が70年代に設立したもの。

感想（まとめ）

昨今、アメリカ社会、政治ないし対外政策にはとかく批判がある。が、アメリカ社会の多元、多様性、開放性に基づく進取、競争の機運がなお盛んであり、一方では階層性に基づくシステムの強化もみられるものの、より自由、平等、公正を目指す動きも続いている。依存症者に対する治療回復支援の努力の分野でも、多種、多様な試みが活発に試行、実施されており、日進月歩の感がある。

この面で比較すると、わが国においては、各精神医療機関や薬物依存症者による自助組織たるダルクなどのミクロの場においても、

また国、地方公共団体による支援システムというマクロの場においても、いまだ諸努力は十分な成果をあげていない、のが現状であろう。

そこで、わが国関係諸機関、施設としては、米国やスペインなど諸外国におけるこの方面での先進的な取り組みの動向をより積極的、かつ継続して把握しつつ、その優れた点をわが国の社会、文化的事情に合わせて摂取していくことが望まれる。

わが国が、スペインの「プロジェクト・オンブレ」のような国および地方公共団体が大掛かりかつ統一的に支援するシステムを構築するに至るには、まだ相当の年月がかかるであろう。それまでの間は、関係機関、施設においてもっといろいろな試みが盛んに行われてもよいのではなかろうか。当面、これら機関や施設で働く、若いスタッフの育成のために、海外研修奨学金やファンドの整備が求められている。

以上、皆さんの議論、検討の参考となれば幸いです。



研修証書授与

(付記) 興味あるプログラムの実例

参考までに、前記3施設で行われている、興味深いプログラムを紹介します。
ワーク・ショップなどで試してください。

A 「三元対話」プログラム (ペティ・フォード・センターで実施) :

3人一組が、話し手 (A)、聞き手 (B)、第三者 (C) となり、話題 (例えば「自分はどのようにして依存症者になったか」) を選び、その話題につき A は B に話し、B は A に対しその理解したところを話し、両者の会話を側で聞いた C は B と C に対し講評する。3者は役割を変えて、同じ作業を3回繰り返す——狙いは、本人の自己認識力、表現力、聞き手の理解力、第三者の観察、講評力を養う。

B よい気分 (good feeling) ないし超越 (transcendent) 感の体験記憶 (クレア・ファンデーションで実施) :

参加者がそれぞれ過去において、よい気分ないし超越感を味わった体験5例につき、その日時、状況、感覚の内容を記述し、それをお互いに話し合う——狙いは、正常人はしばしばよい気分や超越感を味合う体験をするのに、依存症になる者は、かかる体験が少なく、むしろアルコールまたは薬物によってよい気分を求めるが、そうすればそうするほど気分が低下することを理解させる。

C 創造的表現力養成プログラム (パシフィック・コースト・リカバリー・センターで実施) :

参加者が、例えば「孤島で生活する情景を描け——少しなら人を連れ、物を持ち込んでもよい」というテーマを与えられて、紙に色鉛筆でその情景を描き、一同の前で説明する——狙いは、創造的表現力の養成と自己の夢と隠れた欲望の理解、分析に資する。



愉快的仲間コーディネーターの
デイビット・ロモ氏と真面目な友岡医師～
二人の誕生日パーティー



「お絵描き」プログラム講師～
ファッション・モデルのようなミッシェル

2007年10月

吉田 重信